

作物名：りんご

病害虫名：炭疽病（病原：*Glomerella cingulata*、*Colletotrichum acutatum*）



写真1 果実の病斑

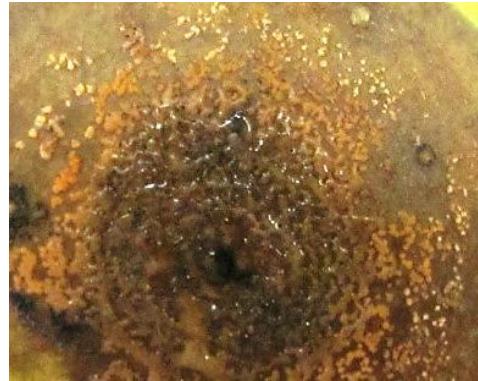


写真2 病斑上の分生子塊

1 被害の特徴と診断のポイント

- 果実に発生し、病斑には大型病斑と小型病斑がある。葉では潜在感染するが発病しない。
- 大型病斑は8月中旬以降にみられ、果面に円形で褐色のくぼんだ病斑を形成する。病斑は輪紋を描いて拡大し、軟化腐敗する。病斑表面には、輪紋に沿って黒色の小粒点（分生子層）を形成し、多湿条件ではこの上に鮭肉色の分生子塊を形成する。
- 小型病斑は2mm前後の茶褐色～黒褐色、小斑点で、果面から少し隆起し、多い場合は数十～数百個程度形成される。小型病斑は、のちに大型病斑に進展するものと、小型病斑のまま残るものがある。

2 伝染源及び伝染方法

- ニセアカシアが多い雑木林に隣接するりんご園で発生が多く、ニセアカシアの葉や葉柄の病斑上に形成された分生子が第一次伝染源となる。また、他の寄主植物としてクルミ、イタチハギなども重要な伝染源とされている。
- りんご樹上では、果台や剪定痕などで分生子が越冬し、第一次伝染源となる。
- 感染は6月上旬頃から始まり、二次伝染も含め9月頃まで発生が続く。

3 発病・伝染好適条件

- 本菌は糸状菌の一種で、子のう菌類に属する。多犯性で、りんごのほか、なし、ぶどう、いちじく、いちご等も侵す。
- 感染には降雨が重要な要素で、病斑上に形成された分生子が雨滴により二次伝染を繰り返す。
- 果実が感染しやすい時期は6月頃～8月頃であり、高温多雨条件で発生が多くなる。

4 防除方法

- 園地近隣の伝染源植物ニセアカシア、イタチハギ等は、可能な限り伐採する。
- 発病果は第二次伝染源となるので、ほ場外に持ち出し適切に処分する。
- 6月～8月上旬は梅雨期にあたるので散布間隔が開きすぎないように防除を徹底し、降雨が多い場合は薬剤の散布間隔を短くするなどの対応を行う。

5 出典

(1) 参考文献

- 日本植物病害大辞典（全国農村教育協会）
- ひと目でわかる果樹の病害虫第三巻（改訂版）（日本植物防疫協会）
- 農業総覧原色病害虫診断防除編第5巻（農文協）

(2) 写真

- 宮城県病害虫防除所撮影

(令和5年9月改訂)